牛鬼退治

おしょうにん
たいじ

劇団からっかぜ・親と子の劇場

ペルシャの歌

あなたは、こどもたちに、愛を与えることは
　できるが
あなたの、ものの考えを与えることは
　出来ない
なぜなら、子供たちは、子供たち自身の
　ものの考えをもっているからだ
あなたは、子供たちの世話をすることは
　できるが
彼らのたましいを、そっくり飼いならす
　ことは出来ない
なぜなら、彼らのたましいは、明日という
　住家に生きづいているからだ
あなたは、子供たちのようになろうと
　つとめてよいが
子供たちを、あなたのように、しようなどと
　してはいけない
なぜなら、人生はうしろむきに進んで
　ゆくものではないし
きのうのままで、とどまっているもので
　ないのだから

（この詩は、六〇〇〇、ペルシャの詩人がつくったものです。）

団　員　の　写　真

日本の演劇は，今はどのように未熟であっても，とにかくこの生きにくい社会の中で，歯を喰いしばってしかし楽しく熱心に勉強している若い人たちの間から生れて来るのではないかということです。　山本　安英　（〝鶴に寄せる日々〟より）

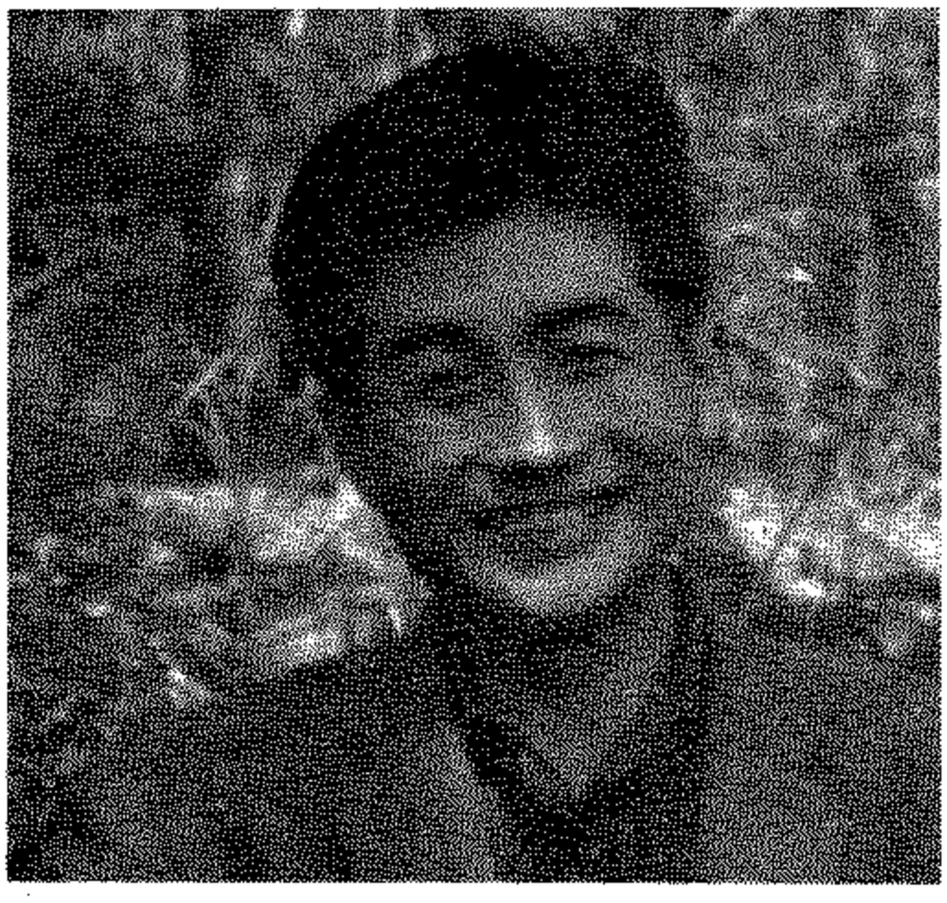
劇団員連名

子しよ造宜子治剛史
〈団　員　名〉
りさく三貞や勝
のひき　あ
熊川　川島　部崎
伊石泉今大岡
坂　」
坂口せつ
坂口すみ子
鈴木妙子
西村たかゆき
野坂ゆり子
八田千秋
林ナミ
土方慎
古田邦彦
深沢大助
船水はじめ
炎　さちこ
堀　よし子
前　田　ゑ
丸井留勝
宮園子
宮島さと学
村越隆一み
野山かけ郎る
〈第4期生〉
池田郷正
石原向子
伊藤輝美
内山翠
沢十代子
佐藤真知子
鈴木ますこ
武田静江
竹島みちよ
野田秋男
藤井千賀子
平間澄江
水谷陽一
井沢としお
金子吉行

本当の勇気とは何だろう

—演出のことば—

いしかわ　ひさし



この劇のよさは何んといっても、「奇抜な発想とみなぎるエネルギー」にあるといえましょう。

この劇の物語は、今も四国の宇和島に伝わる「牛鬼祭」から素材を得て、作者と、演劇をやる人たちと、先生たちが力を合せて作ったものです。だからこの作品は、私たちの心をスッとひきつけてくれます。

またこの劇は、私たち日本人の祖先の活躍をいきいきと描いている点でも特徴的です。この劇の物語は、働き好きで勇敢で、美しい心の持主の伊和称が、村人と共に力を合せて〝牛鬼退治〟をやってのけ、村の危機を切り抜け、長者のものだった村を村中皆んなのものにして行くというものですが、一見単純そうに見える物語の中味は、私たちに大切なことを教えています。

それは、一人一人の力は弱くても、お互いが知恵と力を出し合い、勇気をふるえば必ず道は開けてくるということを教えているのです。でも、これはそんなに簡単にいえないことです。何故なら、本当にそうあるためには、一人一人自分を変えて行かなければならないことだからです。

特に今日のように、山積みの宿題、つめこみの補習、テストの洪水の中にあっては、お互いが知恵を出し合うなんてことは大変なことなのです。とかく、おとなしい規格にはまった、無気力なこどもになりがちです。しかし、子供たちは本来生き生きとして元気が良いもの、じっとしてはいられないでいつも動き廻り、そして、自然や人間や世の中のことをどんどん知って行く、そのようにいつも伸びて行くすばらしい可能性を持っているのです。

この劇に登場する子どもたちの勇気に満ちた行動は、どしんとみんなの胸にひびくものと思います。そこから、それぞれ自分にとって「勇気」を持つとはどういうことなのか、どういうことをすることなのか、を見出して貰えたらと思います。

牛鬼退治

おしようにん　たいじ

——五　場——

あらすじ

むかし、むかし、山深い里に貧しい村がありました。この村の田んぼには　あちらにもこちらにも、沢山の岩が出ばっておりました。おかげでこの村の田んぼは、ふつうの田んぼの半分もお米がとれないで、村人達は本当に苦労しておりました。さあその村のお話です。

今日は年一回の牛鬼祭の日です。

村の長者どんに牛鬼様がのりうつり、おつげが始ります。

「岩にも米がみのろうぞ！」——岩の分までお供えを持って来い、とのおつげです。

村人達は大弱り。今年も毎日、朝は朝星、夜は夜星、牛鬼様のために、はたらかねばなりません。

第二場

村の娘、ハナは美しくてやさしい少女です。のろまだが、村

スタッフ

作・かたおかしろう
演出・石川ひさし
同助手・炎さち子
舞台監督・大島貞宜
同助手・野坂ゆり子
大道具・前田勝
大島ひろ子
土方慎
野田秋男
大島貞宜
小道具・船水はじめ
岡部あや子
炎さち子
小山絹代
照明・川口剛
池田郷正
古賀昌隆
音楽・西村たかゆき
効果・泉きく代
衣・丸井留子
棚橋和美
かつら・牛鬼・野坂ゆり子
大島貞宜
メーキャップ・堀よしゑ
前田勝
製作・鈴木妙子
川崎勝治
深沢大助
八田千秋
坂口すみ子
宮島さとみ

…メガネで生かそうあなたの魅力…

至誠堂眼鏡店

浜松　伝馬町角　TEL 52-6219

一番働らき者のイワネは、石細工が得意です。今日も、美しいかんざしをほってハナにおくります。

ところが、長者どんは、ハナが嫁にほしくてなりません。牛鬼様からのさずかりものという金のかんざしをやるから、イワネのかんざしなんか捨ててしまえ、というのですが、ハナはイワネの心のこもったかんざしを捨てる気にはなりません。

おこった長者は、手に持っていたムチをハナの刺しゅうの道具に、当てしまいます。

ムチに当った者は、牛鬼様のいけにえにならねばならない、というおきてがあるのです。みんなは牛鬼様のたたりをおそれています。

ひとに迷惑をかけるよりは、とハナはひとりで牛鬼様の岩山へ向いました。

第三場

その晩、村人達は、ハナを助けてくれるように、牛鬼におうかがいをたてますが、「荷車一ぱいの米を持ってこい！」との無理なおつげでした。

そこえ、イワネが前よりいっそう美しいかんざしをほって、ハナにみせに来ました。みんなから、ハナが牛鬼様の岩山へのぼったと聞くと、あののろまなイワネは、人が変ったように、〝みんな、薄情もんじゃ！〟と泣きさけんで、ひとりハナを助けに、岩山めがけてかけ出しました。

真暗な山の中。ハナをさがして、つかれはてたイワネは、歌をうたいだします。ハナがいつもうたっていた歌です。と岩の奥から同じ歌声がかすかに聞えてきました。ハナの声です。イワネは、声の聞えてくる岩のあたりを、力いっぱい押してみました。岩はぐらぐらと動きます。こうして順々に岩を押してゆき、最後の岩を押した時、岩は大きくかたむいて、イワネの手をはさんでしまいます。

しかし、イワネを追った来た村人たちが、いっしょに岩を押し開き、岩扉の中からハナを助け出すことが出来ました。村中、大騒ぎです。牛鬼様が岩山からおりてきて、長者どんの屋敷にあばれこんだのです。そして長者どんの倉にかくしてあった米俵を、全部放り出してしまいました。それを見た村人達は、今迄牛鬼様におそなえした米は、全部長者どんが横取りしていたのだと、はじめてわかりました。

牛鬼様は、村の方へも来そうです。

イワネは〝牛鬼様を取りおさえよう〟といいます。

そして村のケヤキの木に雷さまを落し、大きなさけめをつくり、片いっぽうをひらいてつなでしっかりくくりつけました。

やがて、たいまつにおびきよせられた牛鬼様が、ケヤキの木をとびこそうとした時、つなは、はずされ、勢いよくはね返って、牛鬼様の首をはさんでしまいます。

みんなが、こわごわ近よってみると・・・

キャスト

伊和　奈　葉　於　津　亜　日　に　ば　長　牛　村語

和　称　宮　園
奈　坂　口　せ　つ　子
兎　次　河　原　民　史
邦　里　坂　口　論
矢　伊　熊　の　り　子
出　堀　よ　し　え
いさま　渡　辺　洋　二
あさま　林　ナ　ミ
者　遠　矢　忠　弘
鬼(1)　藤　原　博　夫
(2)　赤　松　豊
り　深　沢　大　助
人　山　田　ゆ　す　み　り　子
内　平　間　翠　子
竹　島　山　ち　か　ち　代
藤　井　十　ち　み　か　子
沢　代　子
宮　島　さ　と　み　子
水　谷　陽　一　子
山　本　次　郎　彦
坂　口　す　み　子
伊　藤　輝　夫
古　田　邦　彦
石　原　向　子

協力

劇団・友の会準備会
劇団・OBの会準備会
劇団だるま
森舞踊研究所
静大室内管弦楽団

後援

浜松市教育委員会
浜松市教育研究会視聴覚部
浜松市教職員組合
浜松演劇教育同好会
西部教育サークル協議会
高教組西部地区
静岡県演連
浜松演劇観賞協議会

お子様の夢と科学を育てる

よい子のヤマタカ

浜松市鍛冶町120番　TEL (52) 1301

「牛鬼」とは なんでしょう？

「牛鬼」は、古くは「枕草子」や「大平記」などにも記され、愛媛県をはじめとして各地にその話が伝えられています。又、宇和島市（愛媛県）の北方、光満に次のような伝説が今でも残っています。

それは、昔「入らが谷」（人間の入れぬ谷の意味で、今でもその名があります）の奥に住む「牛鬼」は、毎夜里へ来て田畑を荒すので、庄屋が村の為に生命を賭して「牛鬼」と闘い、その末やっとのことで打ち殺し「牛鬼」の血が石を赤く染めたという話です。「牛鬼」とは、山深く、あるいは谷深く住む野生の牛のことだったのでしょう。

宇和島では「牛鬼」のことを「オショウニン」と呼び、次のような作りものが残っています。その胴体は五、六メートル、幅三メートルもあり、青竹を割って牛の胴体のように編み、棕櫚の毛か、赤色の布で覆います。首の上の頭は鬼に以せて赤く塗り、左右の角は太く長く、四メートル余りの丸太を軸にして上下に動かします。尻尾は剣にかたどって石い御幣をつけるのです。思えば鬼の顔に長い首、大きな胴体にいかめしい尻尾というグロテスクな「牛鬼」なのです。

この「牛鬼」は、お祭の神輿の先頭となり、四、五十人の青年達が、その胴体に入ってかつぎ、数十人の子供達が竹筒で作った貝を吹いてねり歩くのです。その竹貝の音から「牛鬼」のことを「ブーヤレ」とも云います。

牛鬼退治の劇も、実際に「牛鬼」が登場して、大暴れにあばれます。

登場人物紹介

ばあさま―この物語の主人公伊和ねのおばあさん

働き者の孫息子が一番の自慢です。

じい―〝やめろ！おたたりがあるぞ〟と村人達をいましめていた爺も最後には、気がつきます。

於兎次―口は悪いが元気な若者。得意の太鼓で雷様をよびよせます。

津那里―〝勇気出すのが本当の知恵だ〟津那里もやっと決心します。

亜矢―〝おら、木のぼりや走りっこなら誰にもまけやせんぞ〟―牛鬼退治で大活躍します。

日出―こわいこわいと思っていた牛鬼様だが、皆と一緒ならおらにだってやっつけられる。

伊和祢―のろまだといわれていた伊和祢は、皆と知恵を合わせながら、牛鬼様のからくりを、少しづつ解いていきます。

葉奈―美しくて心のやさしい葉奈は、村のみんなから愛されています。ある日、長者のムチが当って牛鬼様のいけにえにされてしまいました。

長者―〝もうもう、われは牛鬼大明神であるぞ。〟インチキのおつげで倉の中は米俵で一杯です。

牛鬼様―体は牛で顔が鬼、尻尾の剣が空に向いとる。口は西瓜を割ったよう、するどいきばがニョッキり。だが本当は…。

これだけは守ろう

――演劇をみるエチケット――

みんなが楽しく、ゆかいにおわりまですごせるように、ひとりひとりが気をつけあいましょう。そのためには、次のことを守りましょう。

○席についたら、しずかに幕のあくのを待ちましょう。

○劇がはじまったら、ぜったいにおしゃべりはやめましょう。

○劇をみていて、いいなあ、すてきだなあ、と思ったら、おもいっきり手をたたきましょう。

○劇の途中で舞台の電気がきえて、暗くなるところがありますが、劇がおわったのではなく、劇がつづいているのですから、静かに待ちましょう。

○会場では、お菓子など、たべ物をたべてはいけません。ここは、教室と同じです。

○お便所は休けい時間に行きましょう。

○帰りにはかならずいすを上げて、自分の席のまわりに紙くずがちらかってないかよくたしかめましょう。

劇をみたあとで、次のことをやって行きましょう。

○感動のさめないうちに話し合いましょう。「みてしまったらおしまい」という考えはまちがいです。

○日記や作文にかいたり、図画にえがいたりしましょう。

○家に帰って今日みた劇のことを家の人にしてあげましょう。

○劇団や出演者に、感想文を書いて出しましょう。きっとお礼の手紙をくれます。

すべての子どもたちに
牛鬼退治を!!

すずきふじお
（牛鬼退治を観る会・事務局長）

おとうさん、おかあさんたちは、だまされたり、さげずまれたりしながらも、なんとかして、しあわせになりたいと願い、せいいっぱい生きているのです。でも、人間的にしあわせに生きたいという願いも、たえずうらぎられたり、ふみにじられたりするのです。だからこそ、せめて、子どもたちにだけは、自分たちのようなみじめさやせつないおもいをさせないで、胸を張って堂々と生きていってほしいと願わずにはいられないのです。

だから、悲しみや苦しさにたえながら、子どもたちへの期待を大きく胸ふくらませているのです。

しかし、子どもたちの多くは、子どもらしい生活を破かいされ、生きる目あてを失なって、まるで人形のような人間になってしまっているということです。

生活と生産からきり離され、生きる日あてを学びとることもできない子どもたちは、統制の枠へはまりこんで人間としての基本的な感覚を失って、無気力無関心になるか、その土台の上に目あてのない「根性」を強調されて体制化に一役買わされるか、そのどちらでもない枠にはまらない子は、自らのもったエネルギーを非行として発散するか、どの道を選ぶにしても、今日の教育文化の枠のなかでは、子どもたちは、人間として、かしこく、たくましく育つことを阻まれているという危機的状況が高まっているのです。

そうした希望と未来をうばうようなきびしい状況のなかでも、私たちは、子どもたちを生き生きと、積極的に、つねに自分自身であるように成長させる環境をみんなして、みんなの力で、子どもたちのために作りだしていこう、ほんとうに子どものためになる教育文化を与えていこうとがんばってきているのです。

生きるということは、人間的に幸福になろうと努めることだよと、はげまし、子どもの問題を理解し、子どもの生きる態度をみつめて、人間的に幸福に生きようという願いと、チエと力とを、子どもたちの中に育てる努力を重ねてきているのです。

今回、上演される劇団からっかぜの〝牛鬼退治〟は、からっかぜの人たちのはげしい情熱と作品の良さとが、美しく結晶されて、子どもたちの中に生き生きとしたチエと勇気と力をかきたてる充分な劇にまとめられています。

ここには、ひとのことなど考えようともしない長者の、自分だけの欲を追求していく生き方の典型と、やさしさに満ち満ちて、みんなのために行動していく生き方の典型が、実に生き生きとすばらしく、たくましいたいこのひびきにのって語られています。そして、祖先の人々の素朴な願いやいのちが脈々と波うって、せまってくるのです。

伊和称を先頭とする村人たちのチエと勇気の行動は、民衆の願望をおしつぶす策略の象徴である牛鬼をうち破って、花が咲き、田畑もみのる村を生み出して行きます。このすじ道を子どもたちは、はだで感じとって、絶大な拍手をおくるにちがいありません。

すべての子どもたちに〝牛鬼退治〟を!!

キッチン好亭Coty
出前迅速　浜松市千才町公会堂西——tel (53) 2039
(52) 9372
浜松駅前ビル地下味の一番街——tel (54) 6051
各種宴会、工場、会社落成披露パーテーの出張サービスの御用命も承ります。

お母さんに

べんきょう

（小学二年　女子）

わたしは、さんすうの　べんきょうが　きらいです。でも、学校の　べんきょうは　すきです。テストは、こくごが　すきです。

おかあさんは、ひどいです。

わたしが、「まい日の　べんきょう」の　さんすうを　やって　いて、いま　ひきざんを　いっしょうけんめい　かんがえて　いるのに、かんがえて　いないと　いいます。だから、あたまに　きて　ないて　しまいます。そうすると、おかあさんが

「なくと　やめかしてやると　思ってると、いじに　やらせるに。」

と　おこって　いいます。

わたしは、いやに　なります。

でも、しょうがないので　やります。

いかがでしょうか。

子ども（二年生）が、おとなのおかあさんといくら言い合いしてもとても勝ちめはありません。いくら正しい意見があっても、なかなかわかってくれません。最後には、おとなの理くつなり、おどかしでもって、正しい意見もひっこめなければならなくなってしまうのです。

それで、くやしくなって泣いてしまうことになるのです。この泣くことが、最後の抵抗なのです。しかし、また子どもの心がつかめないおかあさんは、「なくと、やめかして　やると思ってると　いじに　やらせるに。」

と、追いうちをかけてしまうのです。もう、小さい二年生の子では、抵抗する方法はありません。そこで、「わたしは、いやに　なります。でも、しょうがないので、やります」と、いうことになってしまいます。

おかあさんが、勉強する子にさせようとして、いっしょうけんめいになればなるほど、子どもを勉強ぎらいに追いやっていく結果になってしまっているのです。

（浜松の作文教育の実践の中から）

浜松演観協　九日
九月　例会　二十一日
二十二日

前進座

五重塔

作・幸田露伴
脚色・津上忠

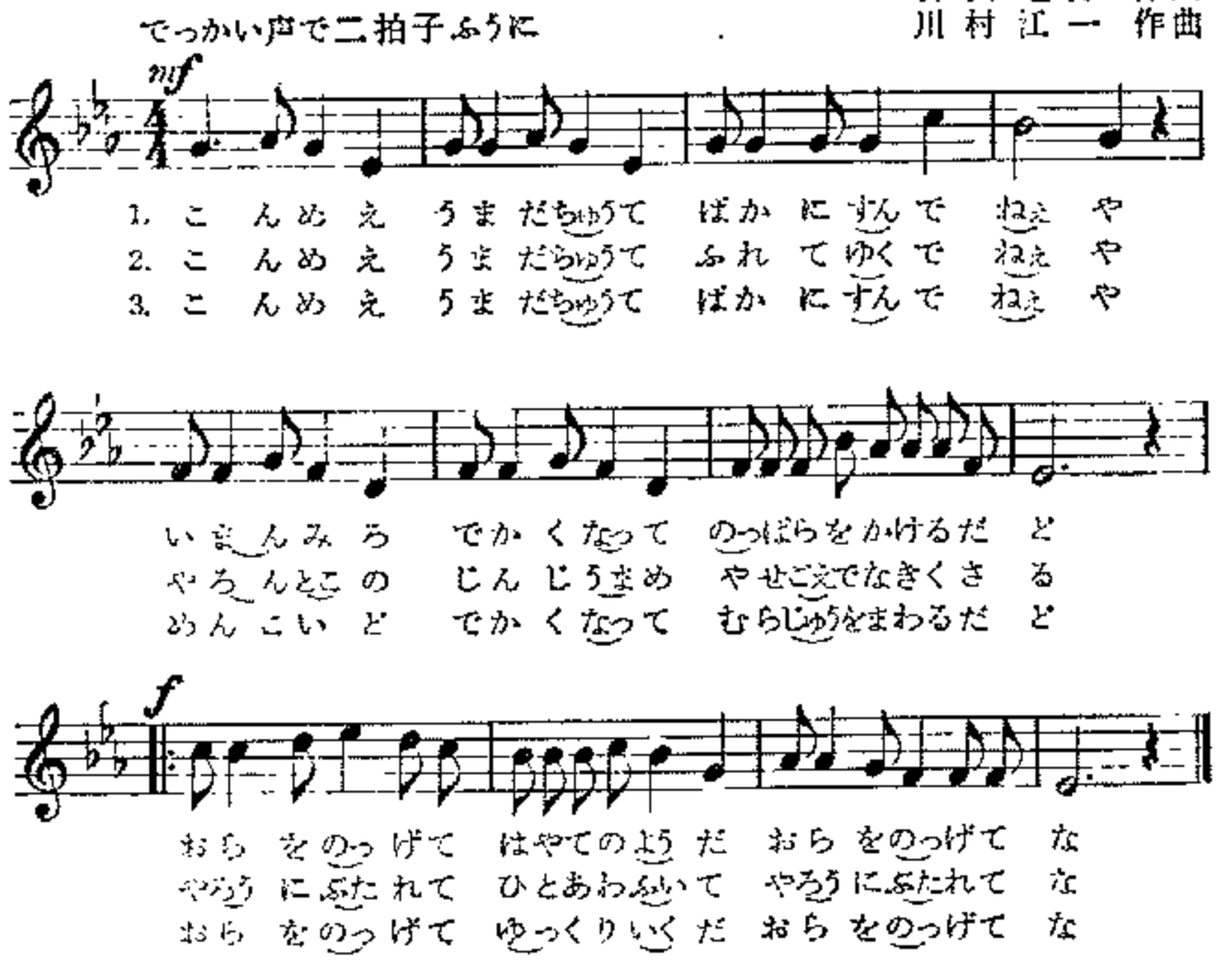
キャスト
中村翫右衛門
嵐芳三郎
瀬川菊之丞
藤川八蔵
市川岩五郎
中村梅之助

演観協に入りましょう。
入会金　一〇〇円
会費　月三〇〇円

申込みは
浜松市田町三十四
電話（五三）九六五三

こんめえ馬

柳沢竜郎 作詞
川村江一 作曲



一、こんめえ馬だちゅうて
ばかにすんでねえや
いまんみろ でかくなって
野っ原を かけるだど
おらをのっげて
はやてのようだ
おらをのっげてな

二、こんめえ馬だちゅうて
ふれてゆくでねえや
やろんとこの・じんじ馬め
やせ声で なきくさる
やろうにぶたれて
ひとあわふいて
やろうにぶたれてな

三、こんめえ馬だちゅうて、
ばかにすんでねえや
めんこいど でかくなって
村中を まわるだど
おらをのっげて
ゆっくりいくだ
おらをのっげてな

合評会のお知らせ
7月3日児童会館1号室
いろんな意見を寄せて下さい

牛鬼のうた

一、それうてやれうて、牛鬼の剣(つるぎ)
岩にひびかせ 山にひびかせ
作りかえせよ 牛鬼の剣(つるぎ)じゃ

二、それうてやれうて、牛鬼の鋤鍬(すきくわ)
畑(はた)をたがやせ、山んぼにうちこめ
岩堀(いわほ)りかえせよ、牛鬼の剣(つるぎ)じゃ

遠州生協指定店
宝石
貴金属
国宏
浜松市松江町62(馬草通り)
TEL (54) 5650 (52) 2587

これまでとこれから

——創立十五周年を迎えて

深沢大助

〈演劇を続けることの困難さについて〉

いつ頃だったか、静芸の山崎欣太さんが「地方の劇団という」と、芝居好きがベレー帽でもかぶり集って、演劇雑誌等で読みかじった東京の新劇の真似でもしているのだろう、と思われやすい」といわれていたことがあります。山崎さんも、その中でいろいろ訴えられていましたが、当事者であってみれば、そんな安易な気持でなど、とてもやれようの筈がないのです。

今日では、演劇をやること自身すでに斗いを意味しています。激しい労働と生活苦、多くの享楽的な誘惑の中にあっては、せいぜいテレビ横目にゴロッと寝てしまうのがオチなのです。それに演劇は、ただ一人書斎やアトリエにこもってやれるものではなく、集団で創るという営みからくる、もっと人間臭い困難さや複雑さがいろいろと加わって来る訳ですから、ただ密かに演劇だけをやっているという訳には行きません。その上財政難、会場難と来れば、どうしても困難な原因を社会的に歴史的に深めて見きわめ、それを変えて行く姿勢に立たなければ一歩として進まなくなります。

カンカラ広場にあつまれ

〈私たちの十五年が教えるもの〉

思えばこの十五年間、浜松にもいくつかの劇団、演劇サークルが生まれては消えて行きました。とにかく、めまぐるしく消長した歴史であるといえましょう。このことはそのまま、「芝居好きがベレー帽でもかぶり集って、真似ごとをやる」ということでは、決してやれないことを物語っています。

こうした中にあって、〝劇団からっかぜ〟は、その制約や困難をいつも抱えながら、とにかくも十五年という歴史を創り出して来ました。これは大きな誇りです。しかし、前記したことを考えれば、決して容易に十五年があった訳ではありません。そこには、この劇団を守り育てて来た多くの人たちの、それこそ筆舌ではいいつくせぬ苦労がこめられています。

その十五年は、考えようによっては取立てていうほどのものではないかも知れません。しかし、細く弱くとも、他の文化運動と結び重って、浜松の文化運動の太い流れを形成して来ているのです。市芸術祭を起し、常にその中心的役割を果し、芸術祭の歴史を書き綴って来たこと。浜松労演——演観協、また労音の結成を推進して来たこと。あるいはまた、「子どもの時、からっかぜの児童劇をみた」と瞳を輝かして語る青年をみかけるたびに、私たちはつくづくこの劇団のやって来た仕事を思い起し、そこから励まされもします。若々しく息づいている今の劇団のうしろには、このような十五年の歴史が脈々として繋っているのです。

しかし、多くの地方劇団の歴史が語るように、劇団の歴史が

ベトナムの炎は消えない

雛人形と花環の店

有楽街(有) 一瀬堂

TEL. (52) 2684　池町工場 (53) 5050

長いということが、そのままその劇団が秀れているという保障にはなりません。現に十五年の歴史を数えていながら、通してやって来た人が一人もいないのです。数えてみたら、何と二百名以上もの人が入替っているのです。だから、有形無形に十五年が受継がれているとはいうものの、芸術祭で示した、あの泥くささが看板のいくつかの作品より、現在のものが秀れているとは、いえません。技術の蓄積が可能となっていないのです。これでは、竹に木を継いだような歴史と思われても仕方ありません。

〈東リ演のこと〉

現在私たちは、〝東日本リアリズム演劇会議〟加盟しております。これは、私たちと同じような劇団ばかりが集って、お互いの経験を出し合い学び合い、そのことによって、働らく仲間の要求に応え得る演劇運動を一歩でも前進させよう、ということで生まれた組織です。加盟して驚いたことは、その歴史も、突き当っている困難も、全国どの劇団も似ていることでした。私たちは、そこで観客に学ぶことがどれだけ大事なことかを学びました。劇団の前進の基礎は、そこにどう対しているかで決まるということ、従って、私たちが県とか市とかにオンブしての公演をそれまで中心にしていたことが反省させられました。観客を考えないでも済んでいたのです。組織的に批評会や反省会や交流会を持ってこそ、みんなの声は十分に活かせるのです。また、民主的な運営のあり方や、研究生システム、あるいは具体的な作品の創り方についても、私たちはそこから多くを学びました。働くものの中から、働くものの中へ、この姿勢を私たちはその実践を通じて理解して行きました。そういう姿勢から創り出した、〝カンカラ広場にあつまれ〟〝陸橋〟は未熟さを越えて、多くの仲間に共感を得ました。また研究生も二期まで送り出し、現在第四期生が活発に活動を行っています。一年間にそのピークの年で七千名もの人に観て貰らえるようになったことも強味です。

〈これからの私たち〉

今回の浜松公演のあと、〈牛鬼退治〉を持って、私たちは遠州地方約十ケ所に移動公演を行う予定です。この公演を通じて、遠州地方の全域の人たちの要求に応え得る劇団に育って行きたいと思います。つまり、私たちのこれからは、名実共に遠州地方の働く観客の要求に責任を負う劇団となることです。そのためには、どうしても創作劇を生まねばならないと思っています。何故なら、遠州地方に私たちが深く根ざし、働く人々の生活と希みと斗いに堅く結びつくなら、そして働く人々の中から作品を取材し、返すという仕事が基本であるなら、それらが結実されたものとしての創作劇を生まねばならないのです。

地域の要求に全的に応えるためには、創作劇を生むと同時に、舞台の質をよくしなければなりません。働きながらだから低い質のものでいいという考え方は、私たちは撲滅すべき考え方だと思っています。職業劇団であれ、非職業劇団であれ観客の要求に応える演劇を創るということでは差がない筈です。

また、研究生システムを強化し、五〇名以上の団員を生み、量的にも前記のことを保障せねばなりません。

以上述べた如く、基本的には、つくる（創造）、ひろげる（普及）、まなぶ（学習）、みちびく（期生）の四点を強力に推し進めることですが、今年は新たに〝稽古場建設〟〝劇団員一部専従化〟が加わりました。秀れた文化を生み出すトリデ――稽古場と、人的保障である専従化を、是非とも可能にしたいと思います。

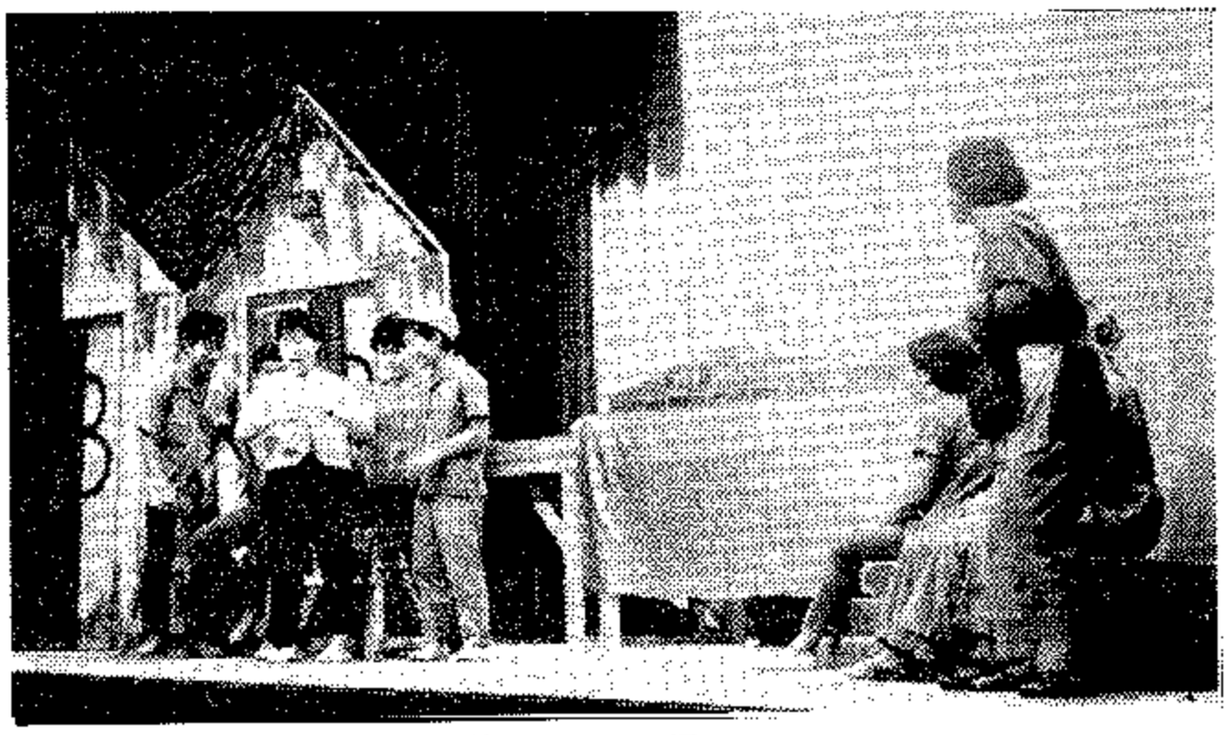
〈発展は遅々としているが〉

大分景気のいい話しも出て来ましたが、現実には思っていることのどれだけもやれていません。まったく発展は遅々としています。

しかし、みなさんの批判と援助さえあれば、そして私たちがそれに応える立場に立つなら無理なことだとは思いません。

――演劇というものを唯の娯楽、見てもらないでもいい慰みものにさせておいてはいけない、我々は演劇を人間が生きて行く為に必要不可欠なものにしなければいけない。

（これは日本の新劇の創始者である小山内薫先生の言葉です。）



陸　橋

ベビー・子供服の

コメキン

浜松市かじ町（52）2241

おそばは
駅前の

東京屋

TEL ㊷ 0201

スポット（1）

――ナナちゃんのこと――

私たちの仲間、林ナミ――通称ナナちゃんを紹介しましょう。最近彼女は「新婚早々ばあさま役とはクサッちゃうわ」と不満気だそうです。それもそのはず、二期生当時から今日まで「陸橋」の〝なみ〟「黒い太陽」の〝ひで〟と、二回も若い役に出合ったことがないのです。それに今度の場合は、結婚四ケ月めにして、なのですからボヤくのも無理ありません。

しかし、ボヤきながらも、団員である夫君、川崎勝治――ブッちゃんとの甘いムードを活かして、ちゃっかり屋のかわいいばあさまを結構やっています。

さて、結婚も終えて、演劇を続けることがいよいよ大変になり、ええいッ、こんなもの、と思うことも出て来ることでしょう。しかし、ブッちゃんと、またみんなと話し合いながら、その試練を切り抜けて行って下さい。

これからのナナちゃんにとっては、それをいかに演じるかより、なぜ演じるかがいつも問題となることでしょう。その試練の中で、増々ばあさまが本物になり、人生の深い年輪が刻まれて行くことでしょう。（大助）

あなたも加わりませんか

――第四期研究生への招待

第四期研究生は、去年の十月より活動を始めました。働きながらも演劇をやりたいという情熱家、自分の弱い性格を直したいという努力家、また、友だちが欲しいといってあつまった仲間、……職場も年令もちがう仲間があつまり、演劇や、社会や、お互いをみつめ深めながら、熱い心と心を演劇を創ることに燃やしています。

九月に卒業公演をみんなで決めました。「ピカの陰から」という作品ですが、現在スケジュールを立て合っているところです。しかし、仲間はまだまだ不足です。どうぞあなたも、この研究生に加わって下さい。

――募集要項――

資料　演劇を愛する人なら、年令、男女の別なく誰でも結構です。

稽古日　毎週水・土曜日の夜六時三十分より

稽古場　玄忠寺幼稚園（浜松市田町・長崎屋前にあります。）

申し込むところ　劇団事務所（浜松市板屋町三一五番地）か、水・土曜日の稽古日に稽古場の方に来て下さい。

発行日　一九六八年六月二十九日
発行所　劇団　からっかぜ
　　浜松市板屋町三一五
発行人　石川ひさし
印刷所　株式会社　開明堂

劇団からっかぜ・第4期研究生卒業公演

ピカの陰から

9月29日（日）
浜松児童会館ホール

―2場―

戦後23年、太平ムードがうたわれるその底で、今も原爆の傷痕は生きつづけている。この劇を、平和を願うすべての人々におくる!!